柳園家集

番外書册

678
内閣文庫
和書
二九九三九
二
函 二〇一
架 二一
冊 二
號
類

和歌雜誌

和歌

内閣文庫
番號 和 25535
冊數 2 ( 1 )
函號 201 678

国立公文書館
National Archives of Japan

我以物因乃義つねに彩色の
[illegible]
乃[illegible]
[illegible]所[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

こゝにいたりてこれ乃柳園家集とゝのへ
いたるものなるよしをしるすそし、こゝ
ろあるものゝちまたにいたるこゝ
ろをこゝろとしてこゝろをこゝろ
とせんこゝろまこと八月六日性軒主人

序二

# 柳園家集上

## 春之部

立春

きえはてゝ雪ふるこゝろ山おろしかぜ吹ける

早春月

山乃はにはるゝ出る月新のさゝらやをむけの新花

早春鶯

けさみれば池のふるいけにはるの梅ふるなく

初春河

水上はれはるのかすみ雪とけ山河

元日試筆

明てなほき春の家ゐなれハ年ふるあらはる
春て（とこしなへ）有隆一表あけぼの心ちしるも

元日子日

むつきたつ今ものゝ（ゝ出つる）ハねの日の松のはるこそ
松迄春彩

春ゝ（ゝ）すなはち毎ゝみれとあるハ松のこゝろこそ

子日松

春の野ゝ（ゝ）ゝ小松のちゝ（ゝ）ゝ人毎のゝ（ゝ）やるもん

正月後の子日戸田氏壽わすれ松

ゝ（ゝ）ゝ松やちゝ（ゝ）
かさりんたりなる（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ
ゝ（ゝ）ゝ

年代のゝ（ゝ）ゝ引松ハちゝ（ゝ）栄ん

夕嶽

夕嶽ゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ

月ゝ嶽

ゝ（ゝ）ゝ

きゝ（ゝ）ゝ嶽ゝ月のにほひこそ

ゝ山嶽

きゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ

山路霞

霞まてかへりみすれは松原もはるかに霞わたるかな

霞中瀧

八重霞たてる山の曙に瀧のまろかしの音のみ聞へけり

霞橋霞

吹たてて霞をつらぬく松風山あらし宇治の橋姫

霞江霞

住の江の松はむかしの立霞むかしの月はかはらけるかな

海辺霞

沖つ波なをしらぬ浦松霞て幾成ぬるかな

霞隠月松

一ひらの霞ぬきに成ぬるとみるに岑の松原

霞

山松のうすむらさきあれくふるこ嵐ふく霞の帯

梅乃花梅月

梅乃花ハ月陽の梅と成ぬる

霞告春

一

霞の琴琴しらべ梅乃花さそはぬ月陽を告めきぬる

暁中霞

暁の霞の琴琴霞のたゝ一琴をしらべつるかな

有明の月霞すき梅乃枝白妙なる霞の琴

鶯

鶯日暮ゆくまでなくあのはこそうれしとわ帰ら林

面影鶯

春雨のまとうしたかるまでさはぬれて柳の枝に鶯ぞ帰

春雨の晴ゆく庭の面影に梅いろさりぬよや鶯乃帰

竹籬鶯

京都の竹籬ハ鶯ぞ代よをへて忘るゆるこなり

鶯為友

鶯ハ心へしてゆなれや鶯ぞ春友

鶯ぞ春百春きゝゆゝとあく今ぞ鶯のうちに

鶯を愛吉

鶯の春来き毎さ人のよふひを忘て成なり

鶯別

此頃ぞ鶯の別と思庭に帰ぬ日ぞなき

山里やとりてやうかたとすふ鶯をきゝて一

家つゝとも忘ハ家ぞゆゆ山ぞこの暮乃鶯ぞ此こ陰

尾久渡て鶯をきゝて

けふ鶯を尾久の渡ぞ毎待をふの原に鶯ぞ帰

若菜

春の野のつまとこそ見てとつむ(き)ねぶかなこ(ら)り
竹あみの堤乃こゝ[illegible]むきはこ[illegible]
春〻春若なゝわかるかゝれ[illegible]

[illegible]中若菜

[illegible]

餘寒月

[illegible]

湖水餘寒

[illegible]

[illegible]似花

山[illegible]

[illegible]氷

あさ[illegible]山[illegible]

[illegible]

形[illegible]

[illegible]

たき[illegible]

梅若風

梅[illegible]

依風知梅

春風のかをりをハ立のゝりかやの軒端の梅をみましや

梅巻き巻き

春かぜの吹くる風の白ひかる梅なりけん吹くる風の白ひかる哉

夕梅

かつらこる夜の梅のをりをりにほのぼのかをる梅乃林哉

夜梅

吹風の軒端の梅はのをるよりちるを惜こそ惜しけれ

毎年恋梅

いつこてもみてもあかぬ梅もかな毎年恋ぬるやをひとをみるん

梅も雪

行のつかつこ風ゝ梅も只白雪のをる形りけり

山家梅

春さむみ出てこねすふ山里の垣ねの梅はほころひにけり

笑て見毎ゝと山里はかきねの梅と見る人もなし

梅交松

此ひとの形の嵐ゝやそしまね枝さしかゝる梅のかをりふ

雲さむきいなしひゝ山松の末はの梅と言ゝとろこる

梅を惜

小紅はそき庭の梅を惜ゝれ散はたちん人乃為

梅を恋色

おつけて越おなる有の梅もほくゑむ見れと散るを忘れて

梅迎客

めつらしく日毎に人のとひくるハ梅の葉や道しるへなる

ことのへまりける道にて梅のちりしくかけにて

梅花ちれる垣ねをとひ来れる日このけさ清く路をとみるかな

柳

春柳のなるしけさりをハ世にしける風の心をと何ゆへしるまし

青柳風静

しらかし柳のすゑをこぬ人ハ今日吹風のなるありとそ

水辺柳

紛霞はなをも乱し川そひの柳か枝は春風ふく

野径柳

行先もあをき柳のこのめかきこそ人あらむ春のへなか

山家柳

青柳のいとふみよりかすむ里をとふ人まれや春の山里

夕眺遊

夕月のそれ不定のくれつけすまれにさそふ霞のつみそ消えん

春海

宇治くと春の海へいかすあとに猿ら波のちるそかくれね

山居春

雲くしを垣ねのうちひちりくにこゆる人の小蛙なりける

春山田

小山田の末ハあをく清泉てほのゝ家の畔のけり原

茅山雲母

初雪山梢ふるれ夕雪入あの遠いかすみたりけり

明坂里 雲

浦風のちるもさるくあり小の明坂の里ハ寒あけり

雲鳥

夕かすみあのうち雲ちかこつよりうちはとみまり

くれて又雨すやるん夕寒あかすむ横さけるの琴にる

雲夕

夕鳥かへる頭やきあゝむ小さあてほふるけるの山けゐ

夕鳥さゝくにまつ一村の辰のうちやけやー家消ん

春月

霞ゆる微ふ月れこゆる夜かすみのきとけ岑れ松風

雲の月かすこて山ハえゝ出るわ松のあり時遠

寒中月

八雲寒かすこてゝ山れる匂ひ出る雲れよ月

八雲寒一雲ハ時ゝ雲の月微月のあひちりとる

深夜雲月

花は花柳は柳に由れとも分けておほろなる月の住ぬる

山家春月

山里の庭の松風音もなくて霞かなりぬ峯乃月影

山里の松のこのまの夕月夜枝こもるかけの霞かかるのみ

夕春雨

春もはてゝ行春雨も此夕暮の思ひ露けりん涙の雨

山畑の麦の末葉も打しめり夕暮ちかき春の雨の程

雨降日山里にまかりて

打しめりこそはふる雨の淋しさそきく帰るなり春の山里

花

桜花身を山鶯にかけて春は何かしれちらぬ残ふる

よしの山花の梢のいかなりて八重ふる雲とそ残る成けり

山桜さきそめてこそ白雲立まよひぬる色はこそみけれ

かそらし此春の花ちらぬ雨のふるほとの心斗そ

待花

打しめりふる春雨の嬉しきは花まつ頃の心なりけり

山のはの霞もあまに勿まりけりいつの花をいそぬ日不れき

尋花

かへりみる分てそ花の里と一枝も花のかくれるとこね

標尋てそれとみしや雲まらん峯まて花はにほひさりけり

歳花

何ゝれ野ゝ山の春をうつし植て風ふく毎に花なるむ

雲竜

うきゝゝ人のいやなゝゝ山ゝの桜哉よりみるより

山のけの松をたゝてむるにつるる雲や桜なるむ

竜雲軒

かすゝゝ伝ゝ行ゝる雲ゝ桜哉ゝ吹ゝ風ゝ来ゝれゝる哉

舟中見春

舟人ゝやゝ舟ゝいゝ川上ゝ堤のゝゝ風ゝちゝなり

後日見春

行ゝ春ゝ同ゝ所ゝ来ゝ来ゝ春ゝ山ゝ桜ゝ花ゝ移ゝ春ゝ

春下送日

年毎ゝ日毎ゝ春ゝ惜ゝ春ゝ

夢見春

見て寄ゝ夢ゝ春ゝ春ゝ桜ゝ花ゝ

春ゝ春ゝ春ゝ春ゝ見ゝ山ゝ桜ゝ春ゝ

思春春

玉鉾の道ゝ行ゝ人ゝ春ゝ

春為雲友

年毎に春はなほわかぬ色なれど
毎年春に
年毎にくる春毎に山川の
里の春にしてて
風静春芽
春の枝さうとうのはつの春風を先に知るいかをりかな
依春待人
年毎に春は老をる立れども二月弥生春にあてて
月前花
立よれい春はあらいけわなきをいの待ぬ月のこゆむ
春ぬ待へ出はるれる月こそ春山の桜なりけり

春陽月
春はなほとゝ春なれ山はまだ光りなる山の端の月
まのよれ月をへうる白雲ハ屋上さける桜なりけり
山れの春はまもとりかゆて紙さかせまの春の月
山霞春
桜春はるをこれを山ぬのあいまきたなる霞
社頭桜
一重の枝れかくなる古社神さひなる春はけきる
池上巻
池水の底つるれる白雲ハ行乃春はるれるかな

沈みさうなる所に霧たちこめて

名所霧

すみの川行く舟をはるかに堤の霧ぞ久しい

夕霧

今をとてたなびく山路をたどるべき夕べの霧を見捨て

山中夕霧

くるべき禁の道い迷はれて夕乃霧に張立うた

嶺中霧

はるばるとハるゝ山陽の嶺の霧の白ひかりける

遥朝に尾上ハ霧あこめられたるゝ霧に色ハ見えをけり



霧に雲

山ゝるみ夕わるゝ雲の白雲に上ゝる雲や梅ゝ咲ゝ

霧雲

日ゝ暮ゝて霧や雲ゝ成ゆゝん立こ暮ゝ岑に白雲

霧色

雲とゝんゝ色とゝきゝ（とゝゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ）の霧の色

霧宴

夏代の永き春日をけふ思ひそこゝ梅こけり

年に入ゝる霧なれとゝとゝあゝなをけふの夕べ

霧為佳会媒

おもれてなふとハれんと思きやむ咲来ハ是非嬉しき

む有花色

見る人の深き思ひや込めりけり嬉しき色やむ乞流れ

上野の桜やゝて色つきぬときって

むさらをひさしたほうへ不忍の池北上あるれにて遊ひむ

三月廿桜さく露北随つりけるを

思ひきぬ桜の枝を露ふりてまたけむちうえむへし帰さ

待通院の桜ちどうそ

見る人のたれあふさこて拾ろぬけ大桜ろ露ひちをけれて

惜む

咲風さみ出るむなみる時ハんとこまハそいぬこなるも

む欲翁

ちりぬへき桜の枝ハ風ふかハむしんそ先ハみつるて

惜む不掃庭

なふなりて掃ハし庭るわさし昔訪ねこむ付むはちれなそ

落花

昨日まで雲とこそ山桜木陰のもとになふハ来ねる

桜むちるハちるもみさ込を若路のかしまた来ぬる

落花

落花の朝ちる庭の桜むちるを惜しみまする人もよ

太隆尼君はしたりとてみちのくもれ枝を
そへて　　をこせたりけれ　梅むむら
れ宿の咲れ雪をとりたりをくへ
梅むめの雪れはのりけもけ一枝をうひわをの那
弥生はつ松平忠盛ゆのをたまりてむ
みをる打　黄の梅の雪を法とて
むをて梅ふをのたれさといひ出たまひ
けほかへ
はむれの年明るかをあしいさけをうをうをうをん
弥生末つ嵐をはけけりかりけれをもや

いのりなをれもして
ほををうをひかをのむれ枝をあれいをれをの嵐や
帰雁
一やをいむををとれ梅のあをれををのかををれ
梅の雪
をををれもあれ梅のかををむを梅の時を宮あて
月の梅の
雪れはいををれを雪金八微月夜を梅をほりけり
雪の梅の
山のハを桜引ををる白雪のあをを雪梅のかをれ

嵐中梅乃

立やすらふあのうらゝゆゑのかぜ人をまねき

山路梅乃

ちるとみてさそはれぬるかぜ岑のたちに梅はなりぬる

水仙乃

玉嶋や嵐のこゑを新酒てい川上をくかへるかりねの

霧中梅乃

おもしろしかつをとしをとの金を京あをへ梅を好る

雲雀

けるにはあるとゆるふ夕ひばりかの山春はれはをはるれて



野雲雀

夕ひばりの野末はけるゝ前をゝる野はのゝ草をとをして

あゝまこの人こそなれはをのゝはあるゝ心とをれて

かへりゝる野の草をゝ入にゝりとあるゝのゝ野雲雀

雉子

きゝ原をゝ野をゝ斗して山畑の末をゝ雉子われさりけり

立こもる里へのはの雉子れや雉子ちゝきゝ雉子

山路雉子

岩つゝし白ふ山路をはさくしをゝ谷ゝ雉子ゝ

雨中雉子ゝ

ひるまてふ人なれの君あるはなれ咲るを月と帰らむ

夕蛙

夕霧かをみてゝゝ山本の面谷川ゝこの川帰り

苗代蛙

苗代のゐやゐかゝふんゝゝ田面ゝ蛙なくなり

面中蛙

春雨ゝ板井代水やゆゝむん蛙の鳴れよゝ雪ゆゝ

面中菫

春面ゝ行ゝ方を田さしを垣ゝの菫咲に今

鄭躅

けるゝと匂ふつゝをめゝかて思ひすゝるゝ家の門原

菜花

山かゝの門田代をもの菜畑けりれ黄ゝ今蜜蜂

牡丹の朝ゝそんて夏川蜜ゝの花をゝる君ゝ

たゝめ乱れてなくゝけゝゝまけゝとれたかゝ

けゝれなんといへゝかゝ

我為ゝをゝゝけゝの深みまさしやあゝ色も白も

躑躅

春明ゝ色咲しゝり明ゝくれなむれゝ躑の数はまれ

山吹

谷川の岩瀬の春はさわらびて匂ふ山吹乃花
京都の八重山吹の紫ひとえ人をゆきて
紫まさりけるかな京の雨の一重山吹一日みるまて

松上蘭

松枝さけるを蘭とも思ひかなしの
常盤なる色ぞまさりて蘭も世松枝の色初色

池上蘭

ちる花をなつ城れる池の底やわれの蘭波乃はな

惜春

色けやわれ降りまき紫なれこれ春のうみ小

暮春月

七日日淋さ新のかんなもん孫さの末れまの月

暮春雨

八重一重ひとえ八ちりて紫陽の八重桜も移ろひまさり

暮春落花

ちりめとも枝まとまて数れ残ちこれ春成ぬ

やよひのまさけまさまて

陸奥なる孫さの京の郭公初音を思ひけれ

暮春四部公

うして行春わうみん帰一部ふかまこと移春

# 夏之部

## 首夏

山ぢ川のわり塔かくかる白雲ぢ人なる事なるう郭
笠の美塔陽ぢ嶋しかをるぢ春やとも点し地
地みつる雲ぢ点して郭公まつ郭とぢ鳴ぢ来わる
なりぬと美塔の山ハ郭ぢとやとぢ知ふ今きなる哉

卯月朔日郭公をきゝて

夜きゝとぎゝし中ぢ郭公を思ハ作りし中
そ夜郭公
ゆゝしとたゝ風きゝゝん郭公美塔の山ぢとの一聲

更衣

ひとゝせの春にさきたつ夏衣かへてはかへる心なりけり

尋餘花

分きてなほ尋ねても若葉のおくに咲く時ハとふやとや尋ぬる花ハなし

未忘花

庭の面の花ハ散りても風よさそへかんちる跡ハ春に返しける

新樹

山松の青葉にとりそふ色やさて藤こそときはにまさる色の松

新樹緑陰

立かへて見し山路にも若葉なるかけの陰ハすゞしかりけり

これも又陰と見えしは若葉の面の木の下にして

新樹月涼

まつ見えし若葉の色ハわかねとも梢もる月の涼しけれ

あさよく庭のわか葉の梢もる月は涼しくも見る毎に

新樹風

あらましきけしき空なる若葉風の音にやかはる

朝あけてわか葉の梢とこそやとも見えしたの

葉かへしはやみの竹の梢の緑さこそ涼しの

垣卯花

夕闇のよるをも月になしかへし八重さく花の垣ねなりけり

[illegible]夜卯刻

うれ[illegible]の[illegible]くて[illegible]心ちなし

[illegible]卯刻

うれ[illegible]より出[illegible]

うれ[illegible]時初より玄川へ汐半[illegible]月夜なりけり

郭公

郭公帰[illegible]とは山[illegible]やる[illegible]

きつゝとあけてかれば郭公[illegible]人もいてちり

[illegible]いまよの初る郭公[illegible]

あ[illegible]人も人[illegible]郭公玄[illegible]

郭公帰てるゝ山れて[illegible]の色[illegible]

五月の月れ[illegible]の村[illegible]

二[illegible]とき[illegible]

[illegible]帰つと人の[illegible]

[illegible]月廿甲戌[illegible]国人横手保民[illegible]

きゝつけまとめる

[illegible]れで郭公帰[illegible]

行郭公

月新の[illegible]郭公と[illegible]

[illegible]夕れ[illegible]一[illegible]山郭公

初郭公

聞きいでしはじめの初音郭公待てあへなく帰りたまへと
人々にもてはやされつるほどに郭公は帰
けるといふきくやいなやとてよみける
かへりなる人もきかねど郭公こゑ忘れけるなるべし
軍郭公

志のはらの沈のさ波立かへりなかなかや上の山ほとゝぎす
思川盛之志の里に住る侍せきをれついてゝ
白雲の上の見れば郭公ほのかなる音を聞ぬ
紅葉の色ぬれまさる山ぶきやあらん山ぶきやあらん

夕郭公

今宵だに待ちまつりてわ郭公ゆくへ忘れむ
床見え郭公

祝見して取毎ときゝを郭公老を祝と見成ゆる
郭公鳴る夕

祝しと吟一形こほとゝぎす見れば忘れぬる哉
月の郭公

月新のもゝ代やゝ成まつり山時鳥形もをゝ侍
ほとゝぎす郭公

郭公形ばかりの吟ゆゑハたゝ見れつゝ笠流

山京郭公

山ても山郭公つしはるきを都の人や待まつ春

都にて雲わるゝ時し時ゝしハ都をなつの日ぶれき

雲たゝる新宮の山は時ゝ郭公飛去ハ雪ゆれ

蒲郭公

蒲和てあやもきく度時ゝ郭公の陰を帝ゝ

船中郭公

見わるゝ度のわたれ郭公舟さゝとそかへりみるまた

久安郭公

みあらは境をくれを時ゝハなりは春の立帰なり

廿一

社頭郭公

重垣神田はとりる夕のけて山時ゝ帰ゆ日暮れ来

橘薫風

吹風る花橘のかをるよそ橘の板戸もけれさりけり

雨中盧橘

風ふりを夏の雨は蕭をかをる深軒の立花

夏ふれを庭の橘ぬれ雨ゝ蕭をかをや匂ふ

樗

あふち京蕭をさきる成をる道行人やかをりみるむ

夕早苗

植さして物や今はとかくうるん澤田は面に月はうつる

是迄つゝ苗

是はその松はのゝもみ度をハゝ田面に雪をとゝ

五月雨雲

山のはかさゝる雲の時きあやさみれ初るけ雨成うん

晴ゆくとゆくと雲こそ消られ〳〵まの雲ハ五月雨は雲

五月雨は雲ゝまて抜しゝ雲山の抜のなさハみハる

秋鶏

くひ寺藤都ハのゝ雪ゆゆるたゝし時の面はまハ

秋鶏行可

秋鶏帰かとそわゝれ赤門の隣ハ又ハまれとなるか

月お秋鶏

村雨の時切庵の藤原ゝ月ものめきてくひなる鳴なり

麻蒔秋鶏

祝蒔してつゝとゝ抜りと乱ゝ抜のゝ諸の屋ゝくひを帰

山家小鶏

なるゝ水も味ていくひるのはゝ武たれ山里ゝ鶏ゝ問き

船中秋鶏

近ゝくハくひまや又もたゝかんやゝ船ゝ抜ゝ河をゝゆゝ

漕ゝ抜る毋はゝ抜ゝ抜ゝくひ秋鶏ゝ

照射

螢より早苗にやいさん夜山は雨のまゝみな照射しけり

螢

よるしほをかせてやかねと螢とふあつゝやみの行へさる浪

是ゝの山のはゆるほかみえて峰ーもとの螢なりけり

窓前螢

風わたる濱辺のまさごにおちしきて螢は成ぬ窓のあたりに

窓近き庭の流れやなかれたる草のかげよりかふ螢飛来

軒ちかくむかしの窓やとめてんあふしのゆる窓に螢は

橋辺螢

家居のまれ小河の岩橋そこやうき流るゝ螢なりけるさ

水上螢

うかふようすゝ螢の影ありて浪とかへりてたちかへるれ

夕やこれあやめは庭のまへになれる螢は光の影きらけり

あれ清き山下洋のそば草原くれて螢となりてけるかな

河水をすぎぬれと見るもの二あしへを出て螢飛なるさ

晝夜蝶

むしさめの晴ても淀は常蝶の翅さへ秋のはやきなきにまで

風前夜草

風吹は涼しき庭の夜草をいはひをきて袖とことはりける哉

夏草茂る

夏草の生ひそめしより水い吉沙こそ、かくれさりけれ

瞿麦 撫子

うしろ手もとくく色をおの光も涼なそしされも

蘭 鬱金草

なりつゝと咲うみさしたちそしこの色咲ゆる庭の植を

あつき風度の蘭わへ咲に寄久しきなそしこの色

蓮

面白ゝ池の蓮咲おちくしきかをる涼 池蓮 蓮

池蓮

蓮は色のもかのもくみは初てゝるくさ丁むしの面うな

池の面舟をうかゝむかゝそ好なくて蓮の花自へそ

所せき池の蓮は葉ゝ波ふしなゝ波かをる涼し

蓮

疎屋夕顔

綿ゝやとなりはとをんけきゝ新ゝかゝる夕良のはな

夕立

たゝさりそのの墨ゝ夕立のたゝ一面ゝ日ゝ川ゝかな

夕立のるゝ法六月のそとえ花作平さりしま

夕立

夕立はそさはゝ面はて和山の打ゝ入日ゝ法ゝ

夕立雲

あまの原ふきはらひて夕立の雲立たあひ面はぬ雨

河の夕立

秋の八十路けふりて夕立の面れはさ〻〻成もゆくえ

路夕立

夕立の面ふりくる杉原をたのみ陰もかくるかくの

くぬぎ原風ふきはらひきて荒川の堤強くる夕立の雨

野路夕立

ふるさとをたのみわれぬ夕立の面こたれる花の松原

夏夕

ゆかと行夕立なりゆかとまたくり月涼むも

夏浦夕

浦波を入日の影もうつして涼しくなりぬ磯の松原

よ秋をあまも涼りくり海人の住浦の磯やけ夏の夕

夏月涼

夏はよを涼きもとたけ夏ハ夜の月の光こそり

秋陰夏月

吹風ふかく水枝のひかりて秋月の涼さ

江夏月

みまくはの夏はよ月すめい蘆のもと塚さ秋風

浦夜月

あけぬとて烟もこめて秋霧の浦の月は新の涼さ
更行くすまの浦波高くして涼しくすめる月のかげ哉

夜月の秋

山の端を出離れぬる月にあはれをそへぬ
けふの更ふる毎の月のけたかく秋とそいふへかりける

夜風

梢をもゆるかす立ぬる高きは吹こす風も涼かりけり

夜山

嵐吹く杉の木陰を行過て秋の山路をるこしけり

夜雨

夕立の雨はそめて蓮ふる大雨涼しく成ぬるかな
六月の四月の新の惜さん市ふしてのこ花なくはり

夜神祇

めをしと神も思ふらむ紅葉の錦かさかて帰

述懐

わ伊(ま)とも袖こそぬれ山高ゆ夜はゆ涙流

野泉夜

高はたて涼き庭の泉水を手ふれてもてあそぶ秋
清水ゆく岩ま八方の松風はまやもひてなくに涼き

なり立ていさぎよくはくれなゐなる泉の吉野川さ
岩ばしるつゝもとは涼さこそ思ひなさるゝ心ちして

深山泉

おく山は岩のはたゝ涼きいろのみをぬ流きわるゝ水

松下泉

いとこゝ涼こゝろさへ松もしたりはたゝ涼さこそ

納涼

思ふとも月みる夜はしろさ吹る風さへ袖のしき
はねもとゝいとたゝ涼袖の上ふるしもろ彩乃松風

夕納涼

夜ゝはたゝ涼とこつる夕風のやゝ袖ゝそ涼ゝ

暮ゝ納涼

こゝ月のあつき雲ハ暮毎さ毎ゝ風ゝ待む
涼ゝさゝ雨ハあしはたゝの門さけわさん〳〵て
隣もとやいたをかゝらん涼く歩ん彩のまゝ風

船納涼

涼さのつくハあしとまひ柳のまゝ船よきてん
まゝくれを夜ハゝそこ赤ゝ涼き風ゝ袖を覚て
隅田川舟さそつゝくゝやゝハ涼きゝ月かゝ成む
夜ゝ夜ゝ月ゝ月ゝ思ふ舟ハ涼き

[illegible]

[illegible]

山陰[illegible]泉

[illegible]

晩風の秋

[illegible]

[illegible]

秋[illegible]

六月立秋

六月[illegible]

秋之部

立秋

[illegible]

山家秋来

山里[illegible]

風告秋

[illegible]

初秋風

[illegible]

初秋懐月

秋はきぬ白雲秋の神ぶきまれにをん月の光さ雲風あらせぬ

浦早秋

ものすむ須磨の浦人今さらに波の色にも秋を思ふ

秋風

秋風の初て吹るる夕べは袖にも涼しかりけり

なにそゝか袖にふるも秋風のみるむ汐干涼かるらむ

七夕

今宵とゝかきて見つるこゝろ秋はさくる秋なる正しを

萩水珠

秋の野の色なきわるる秋萩ぬるとくてもむとそみれ

秋夕萩

夕〳〵に色葉の萩のきりはきや萩となるまで初るらん

秋夕思

萩なる庵のすきはみても見秋の夕べ物そかなる

浦秋夕

浦風なびくもの煙さめのもつけて秋涼し

萩風

山颪に萩の上葉を吹風とまゝに萩なる涼しさ

夕萩

きゝ人の袖に萩のそよ〳〵秋の夕

曉竹萩

萩の花さかりなる曉ハ袖こぼれぬる露

有仁萩

さてこそ花ハ露さかりぬれ

秋のうゝ萩をこそ

吹とゝもわが身の秋風ふかゝとのまき萩の葉のな

萩

却ちへての〻ハ葉をみ[illegible]ちぬるとき秋と萩の色

月の萩

ものすさまじ[illegible]秋月のあ[illegible]

萩玉露水

秋萩の玉ハ下ゆ[illegible]水ありと皆とてみるぬ[illegible]

乃

[illegible]秋の山ハ[illegible]

初乃

七夕ゆ[illegible]乃の間ハ[illegible]の色ハ[illegible]

[illegible]田の[illegible]秋風[illegible]越て[illegible]

山の[illegible]夕月[illegible]

曉初乃

乃の[illegible]月ハ[illegible]

船中雁

船よせし岸ちかくてくる雁の聲やゝ近く聞ゆなる哉

月前雁

あかなくも月にかくるゝ横雲の晴ゆくほとに雁そ帰るなる

山端の月ハ出来ぬ雁ハ来ぬ見るを詠めハかたるによそえこの事

又方は月よとこそみる初雁ハ人まとこそゆるも嬉しかりけり

湖上雁

雁の遠湖に聲をつらねてきつる哉秋風寒きまゝの入江に

波の上にこそ立つの雨雲晴て松より上に雁ハ来にけり

鹿聲遠

秋山を夕越く風を身にしみてきゝし岩のあらしつゝ鹿の帰るなり

夕鹿

夕暮ハ秋のあはれやたへ（きこえ）ん峯も尾上も鹿の帰るなる

月夜の鹿

秋の夜ハ月にさびしみの聲きこえたハ梢ならねても涙たちぬる

風前鹿

吹まよふ嵐やまそうきそふ夜見けるに成ぬさそしかの聲

毎夜の鹿

鹿の聲に毎よ嵐て成ぬるハ山深山の妻やこふらし哉

鹿聲夢

さをしかの妻とよばるるおとこ鹿の名ぞハ同じ

山路の雪　康

京にあるしるの山ぞまさりける谷ゆ出しさをしかの声

野もり

村雨の降きかけたる星三つあれはそろはぬもの哉や

虫

袖ぬらす露の柳のはらはらと行こゆるるの秋の哀さ

北野の秋はなをとめ[illegible]

枕辺虫

秋ぎりてもさめてもねぬ虫ぞよ枕のもとの雪ぞ

野もり虫

武蔵の屋敷を月は出ぬ雪ぞ成ける

[illegible]

野を[illegible]みまもり毎に[illegible]

蕭を雪虫

[illegible]

水辺虫

[illegible]

七夕非一

秋の野の[illegible]

夜もすがらの琴をきゝて

秋風の吹くうちに宵毎さゆる月文は彼の衣さ

詞遠

寄れゆゑ〳〵なる彼れゆゑ実詞遠くや詞のきわたん

月

月清と雁の声砂さこほるゝの出かてなくもこゆゑ八重

いつはゆる月の宮ゆかりゆらん今宵の松に出る事

世月れる所の月をたきわる八重塚の宮と成とゝり

夕出月

人れもあれ所山の下ふ主みる今やこれゆる月八出へん

深夜月

見る人をあしと思ふさ本ふ月八光をつゝ成りけて

山月

たゝよれ雲八樓さ立るまりて獨さゆたき山れけのつき

月出山

山の八ぬ出はまれる月これそと雲を見ふかゝさりけり

山残月

就星そうこれ風を秋出れもこちれけゝる月八出ぬ不

有明月

見ゝて〳〵年ゝる里の茅村ふ家をやとゝと月八清ケり

そわは昔はとの方のかたちの陸月とてやや
出れば月の高はたき方つの山ちの庵の月を況り

冥府月

京のことはたちひ入て茅生はたの家をたちふ月を況り

打月

京南の彩雲の打のこのまよりとゆれ山はけの月
月は今あらはれそめつ京方の軒の横ふ松のうゆきに

更科月

よそそはよも更科と堪はを田毎の月のやとりめるかな

月照流水

山ふて高ふ流のさとふ流こそ堪れ月はよ流を

月光れ沙

和田の原はるて月れを沙ふる波不ちる

江月

ほのと沖ゆふ舟ふ月出みの江の名こそ言はれ

湖上月

ほの海神わ立れて波ふ人沙とゆる秋の月

今夜見月

月方のよそ氏多ふ破りて言ふ堪ふ人も有けり
なのふふ比ふ秋八月ふそふ明ふ人ふ堪る人もこそあれ

月下言志

いつはまた老をおしまぬ人の新をみるく
世の人のうめてなんとのうかへ月のまそのゆ

月お風

おくふくよりの秋風をみてさやるなりぬ峯の月うそ

月お雲

久方の月のあるの浮雲ハ人の心かおもはるけり

月お伴風

風ふけとなにを面ゆる行なれ葉の月の新をなるぬ
吹風をそよ新の星ハ月をとる松を時雨こけり

月お鶏

宮のゝ月をまつむを明ぬやハ鶏おのゝ鳴らむ
月ハ中をあるけきもうそ好さつと宮てとりハ鳴覚

月お函

さしとゝ移やの枕の思ふん月を埼ゆるよし好れそ

月仙昔

みる人ハ年一て老と宗ゆるを月ハ昔の秋とかそ

惜月

山のうかふくれハおきあつをむを月ハ生ぬこけり

秋深月明

七月はつかの月夜に新すみてさむくも秋ハきりてくる哉

山雲

八重こもる山路の雲は晴てあるれなる杉の村雨

信上雲

絶てゝ河瀬の雲ハ消ぬたゝみかのゝ舟はこゆるそ

秋雲

大空をたゝよふ秋の白雲のなとみる迄て消うせし

秋山雨

秋山の雨あらしをぬとうもれ葉の落たるをとゝ

秋里

しけなきをしなれはそゝ[illegible]けれ秋をやる秋は里

秋水

秋いとゝ[illegible]なる時ふ杉の葉ハ常盤の色に[illegible]

山京秋

秋つゝみ時雨ふりて山葉ハけしの柳ちの目[illegible]

高ゆ[illegible]る[illegible]道ゆ[illegible]ん夕雲たちの秋の山里

田京秋

けゝ[illegible]ゝ[illegible]稲を苅あて年豊ゝ[illegible]る秋哉

小山田の田の稲[illegible]あるゝ[illegible]ゝ[illegible]なき[illegible]

秋猪

行のとゝ林人をとゝ山のハれ紅葉ちら〳〵入あのゝ

秋晩景

入日さしてやゝ彩の山柿の色さへさえ〳〵しく秋のゆふべ

秋景情

みちのくにえそちの景色もとゝの月ハくもりあとれ

かきくもり雨ふる毎ゝ秋雲れ立田の山を見ひこそやま

秋日曷景

京師のゝ紅葉ゝ少日新さんかゝ〳〵れ紅葉する哉

秋日時雨

うき雲の時雨てけゝ方毎ゝなるあるやゝの秋の山〳〵哉

おもふ

秋のゝる則とゝかゝゝあい林ともおもふなりけり

たゝゝちかゝゝとすれと林きハ秋の名れハちりゝ

きゝゝすゝ時雨さもゝ紅ゝ葉ゝ上ゝ染わたゝ流

月よゝハ雨ハとゝて紅葉も雲ゝ乱ゝ散ゝ

搗衣

立こむる雲ハあれゝゝ雪ゆゝふ山ハなきや衣うつ聲

少搗衣

衣うつゝゝゝゝゝ山ゝ里ゝ秋のゝ分山の里ゝ雪成らん

月下搗衣

白雪のとゞまるなきねて小夜衣
ゝもしらぬ月さえなきねて衣うつ
紙は心のまゝなるこゝろ

紙夜搗衣

祝ひてゝさめてゝ雪ゆゑよりの紙や衣おもらん

連衣搗衣

里毎ゝ毎ゝ衣おなじゝゝよりまや同じゝなるゝん

搗衣到曉

ほのゝとゝ月はまつむ里や衣うつ聲
ゝけりゝ雪のきぬゝの夕暁ゝ曉うけてうつゝゝ里

海辺搗衣

衣うつきぬゝ雪の浦波ゝ沖くゝ雪ゝ秋のゝゝ

名所搗衣

時ゝ日ゝ秋風ゝ吹ゝ衣ゝ里ゝ衣うつ声
ちはやぶるゝ川風ゝ吹ゝ更ゝ衣ゝ
ゝ里のこゝや都ゝきゝこゝゝ衣ゝ里人

古々搗衣

衣うつ雪をしきたゝ古々の荒ゝる庵ゝ人ゝ住ゝ
たれゝみゝ衣うつゝ古々の袖ゝ雪ゝ涙ゝ

菊

いつれゝ見ゝ白ゝ菊ゝ雪ゝ紙ゝ衣ゝ

菊の花匂ふその袖陰いかを見てやすぎにけんん

杉菜

いくさんかをなつみ菜の花たゝ八枝の春やこれん

梅菜

菜の花の盛りはさらに一枝ゆゑ折てかざすも春

雪ぬけ

雪ぬけ日毎さゝれる菜の花あるやゝ代の春ぬけし

いつてもこゝてもかゝて日数のこうろひてゝる白菜の花

凝菊めづ

白菊のさける霜のあやしきに秋ぞ春のつもりなりけり

山茶菜

菊の花盛りなれと山里ハ都を出をみ人のとひこぬ

河辺菜

庭潦てゝ秋の山川さうつゝ流き白菜の花

紅葉

秋なくて子入なりぬ秋山ハこそ行人の袖もてゝそ

思ふ人もちもれてきろれと秋山の紅葉の陰ハ休りけり

都人かゝて陽る紅葉る秋の山へと思ひそやれ

もき枝ゝ紅葉なりやゝ紅葉の紅葉の尾

雨紅葉

阿武ゆくさかくしてえしの山はやもかの山はやも紅葉初るむ

林葉初紅

かめこゆる一村はやもつきぬるの時雨やうるそめらん

紅葉色好洲

かきくもり雨ふりそめて中まを嵐岸はの紅葉

紅葉深

ちりの写定山林日こそてをれるもなりるけるかな

紅葉

いさらはいもりてかさん紅葉あるをまるこもちるこそすれ

庭紅葉

京都の庭の垣根は紅葉をこそ成ぬ一日くて了

池色紅葉

かきくもり雨ふりそめの新の紅葉の色やそらん

紅葉映水

谷川の山のもとかへて深より下行水も色なりけり

山路紅葉

いさらは山路をこそ夕暮の紅葉の今は盛かし保る

松杉の色はこもの孫まで紅葉たるを秋の山路を

霧深秋山

秋山の樹のゝ色つくハ時雨ぬるゝ雲やそめけむ

松百首歌

わゝ入てゝ分すれハ山松の浪まハなゝて紅葉ちりけり

百首歌

村雨ふるゝ山路をぬらん木ゝの紅葉のぬれて色こそ

行路紅葉

鶯声はゝ山ちをゝ分るゝなるゝ斗紅葉ちるゝ

旅中紅葉

いゝ行て都の人ゝ恋ゝ斗紅葉のゝ色一枝折まゝと

山路秋深

山里ハ冬ゝ先ゝゝ木枯ゝ庭の紅葉ゝ散ぬ日ゝ

秋ゝやかゝゝ冬ゝ斗ゝ都人庵のゝるゝきゝにゝんといひ

時雨ゝ紅葉ゝ散ゝ山里ゝまゝきゝふゝ冬のゝちゝ

雲秋月

京雨のゝ山垣ゝ紅葉ゝ散ゝ月ゝ

雲秋嵐

雲ゝ散ゝ紅葉ゝ

雲秋面

秋深みゝ山ゝ夜明面ゝ庭の紅葉のゝ

雲秋滝

ひきくる雲はしな山もの石葉は黄乃入あのう

雲秋去

さまくゝ小ゆし虫の群とのいよくゝふかくゝ行の邦

秋ゆみ葉末ゑつゝ緑芽生のはゝの花ゝ小虫も鳴也

もの考くる秋毎ふかれゆくゝ草はの葉や影成流

雲秋里

秋ゆみ葉末ゑつゝ毎ふれゆゑ里はさくゝ思ふ行の秋

九月晝

雲はくる秋の行くゝ志ふれゆゑ石葉ふあゝ行るゝ

冬ゝ部

初冬

落つゝる木の葉の下ゝ嵐をわるゝ行きふくり

初冬朝

木枯ゝ吉さゝ山の石葉を秋ゝかゝゝきりけゝ

初冬歌

みゝ枯志む岑は木枯ゝ吹れてあゝれ初る日は光ゝ

時雨

かきくゝし志くゝもみゝ紅ゝかつ時て外山の松ゝ入日さゝ行り

山風の吹ゆゝくゝ志ゝれてゝ行るゝ時雨ゝ行ゝ春

月お時雨

こがれる時雨は雲の照月はかつ〳〵袖を風やさそへる

冬部時雨

清見潟冬吹る沙風よりくよ時雨は浦つゝひする

稲妻時雨

時雨くるとゝつけても休きゝ沈とり世をふる音ばかり

旅宿時雨

ふる雨ゝ袖ぬれぬ旅衣時雨はしたさゝめくして

十月雨

神垣有嵐さもしてゝ雨の沼るや秋はくゝみなるらん

雨紅葉枝

木枯のふきまよさる枝はん一むらゆる紅葉をもちも

夕木枯

ちりてきたにきき夕を木枯のいくるきまを吹ふ後

夕落葉

夕嵐ちゝ雨葉をしむまた色みそぬをくれる哉

落葉時雨

ちりつるこれよれいこゝ雨ゝ袖あれるを高かくしねさりけり

寒枯嵐

はつふきあの夕とたし時枯を伝を嵐のふきふゝらん

寒松

明日さへ冬枯松の末ながらとゝろかへるなさむけし
はてしなきわびしの松の梢より明ゆく空のさゝやかに

田家雪

小山田のわびやの軒のゆきかゝる松はかりにて雪のとゝまる

雪夜月冴

雪の上の月のかゝやくとみるまに小笹うゝのよそれ月新

寒夜月

月もさゆる袖のうへにてあかしあかす霜の月はいとなりけり

閑冬月

逢坂の関の月はいかゝ水さゝん松の月は新ゆくゝゝき

海冬月

海原はいかゝ水さゝん海原に沈て出る冬のよれ月

山水初氷

岩つゝみ山かけしのぶれ水たゝる冬ハ来こゝろ

不居冬夕

夕日影ゆ隠て寒のとゝまあれ松ゝ吉れ冬ハ

冬夜

為帰雁ゆ行つゝて聴きハ冬のよもの小ちゝけり

冬延

思ふもちぎりそ遊ふ山ろさハ家をさけるきくあふなき
行雁
堀江川舟の行きはなれをはてる野のあきの月かな
千鳥
淀江や秋らあはるさ和歌てさむきれくちとり鳴なり
孫山の行ゆ波の色をつはさ志めてゆる鳴妙
寄千鳥
淀ゆる波はけるゆ妙ゆ波のくへ寄きりけむ
はるかま波はなれ千鳥ゆ浦ゆる孫山風のさむきタて
暁天千鳥

月の月新さ志淀行ゆ数あくれてちとり鳴妙
蓬雲千鳥
いさり火は新にそめて蓬雲波はるかゆ千鳥鳴
名所千鳥
箱崎の松の根さ志ろく和歌て明行波ゆちとり鳴
ちとりなくなり
さゆ更てゆる鳴の明方波ゆ風ふきあら弁
山路霧
旅人やまはとゆさいそらん山路かきくしたとれ隠きね
蓬雲

法師人に有るまゝ可き事ならねば
みのうれいとたちまちこれを捨てゝ一すぢと思ふ事さふ

山家雪

都を捨てこゝに初て雪をわふる初なりけり

船中雪

かきくらし降るとも見ふ隅田川袖にはあれぬ
依言寄恋

ありはてゝとへるこゝを初雪に浅くふる日ぞ深
雪中月

思ひのまゝわる月に大雪ふれば立ゆて乃ち帰なる

雪朝

大空のこゝろはけさぞ冬ぞ寒き言の葉かな

炭竈

をの山に立ちの煙か消て炭焼ふるゝ日ぞ淋き

向炬火

東こゝろ百ふ嵐ふ吹きまさる宵にて向ふ炬火の埋火
彩霞ける梅も柳もまつさきん山埋火乃はるれてゝ乃を

歳暮梅

京如くんの梅をはこゝろひまり
学ふ者をてゝかな梅れ花を年れ乃ちより匂ひ乃つと

東雲市

多賀振神田の市ふみめうる翁もいとしき年ぶくをり

都東雲

年ふるけーきも所ふるゆきふるまき新大路

雪の年除歌

ふりつる年のとしの暮れ行くしる都大路八雲をつもし

# 戀部

戀

時しらぬあみをたれそ思ふる心にまかせてそめけん

めはそれ物の恨のこのさいもゆとも人の言ぬこけり

岩木をつら根をうねをさきあれなの言まちや

まとろまて夢も人のこはまい地思ふこそねれ称

こゝ地とは思ひ定むる夕雲ふ定ふ所あ所り

はれなと思ふる意ふ意ふきハあれ以ふ所なるこん

つれなきをうねをこそて意ふきハふまみぬるにしなこん

いまもしき人のふれ秋ふ見ふみてるを八度ありけり

あまれる浦はなれてふねのとうやそとをみるあかしのまに
いのるきんいうふをおもひ秘図さいはいをぬくやいくもの月
思恋
かく計ふのうとをしるこゝろはんをきるぬ袋なりけり
不逢恋
夜をこめて逢きく人めをとゝをてかりまくしたゝかりぬる
五月雨はさまりゝる月をめまれ物人あをぬころ
不忘恋
忘れぬをわすれて人を有物をうるゝ人をなをや忘れぬ
悔恋

山のゐれぬきんとみてしすり袋のこて秘けりまれをき
疑恋
とゝをるたのめるすれるゝ袋ふのうかゝん人のん字
在所不知恋
ゐしとをうしとをゝをゝきんかゝれし時住思なるそこをきゝね
見出増恋
れさうにのきすきゐゝんむをと思ふものかゝ恋きやなそ
見返るゆゝをゝ
跡をなききゝむをきゝ袋をかきゝれをや
袋をゐ袋ゝ袋をゝ袋をゝ袋をゝ袋をゝ袋をゝ袋をゝ

夕恋

夕暮はなほ門き時ふとはうき人すがたあつる

夜恋

白露はなほ消えぬ秋の夜をいとはぬ人の袖ぞ乾かぬ

よしのゝ山のまつのあらしも風ふけて恋ゆへ人のかゝるかけ

不通夜恋

かへりにし人の道すがらむなしく祈わすらいる有明の月

依恋所恋

伊勢の海ゝ袖そといはれやすあらはめ有けん

名所恋

恋身を世にあり人を見しの浦ましなれ

恋枕

高野の深草やとん恋侘て枕るおつるまゝ成て

秋恋

いつとても秋のすゝあるる君あるの秋乃上の色

たなびくたつの〻き秋なるあ風と京中川わるきもれ

身をつめあれをそ秋とたれ虫ふ秋絶ぬ

冬恋

夜をうきむすぶ氷のとかるき人のいをいくよ寝

あれはてさむきはよもの君ゝ稲りやはるゝ夜かゝ記

おとそめるまあしたの白雪のつもるふゆをいるはるもむ
降つもる雪をかとふよひあはとはぬ人をこそ思へけり
見そへて雪のつらはなひ行はおとけーとのいかなるらん
つれなくけるこの人のもとへ
恨こて高つまをいはねはなるわたのむる雪人のきはね
山ちかくすて見ぬ行て女のもとへ
はるそーける
山さそ花はるのはあれね稲ふすはぬ人ちこはすれ
春月 京
青柳ふる山の付出月新の雨ふるまとの雨の雲の紅

君くやとねもの雨戸を明なきて待よのそら月出きぬ
春風 京
秋風の吹るつそも出きいちきぬ人乃伝はりけり
春雨 京
はらきさふあてまりより淀川なる水のある流や
春川 京
流てと行られもむ淀川さ半淀き人乃こころを
春海 京
いきの海ふるの座さるみるあそかまほ乳
京井ハ松浦の海もへそはをもろこ斗きく知ぬる

家出恋

秋深みよ毎夜かこと出の月乃絶ふれなる天おの

家名恋

名にしのきふもしれるあるうきて相見ふ部やいのり

家鶴恋

あしうのひとり住辺ま祢をふ寄きくをふとて

家住る乗恋

なるへてふとたらふたよりやをあ垣ま垣へてるとも

家面新恋

面新のこをり新れぬ云れきいつしなきあの逢ぬなき

云してるあ〻ま扇をそ風ふ方と使ふ人れこあ〻祢

家名不恋

かさ紀の松さいよりるまきね云ふあ〻氏ふなくして

末流さこたるあ〻みの浦れ〻みるあなきまする行根こむ

おくふ〻してよめる

流の川上ま畑ま畑のはるのたれいろあ〻ふん

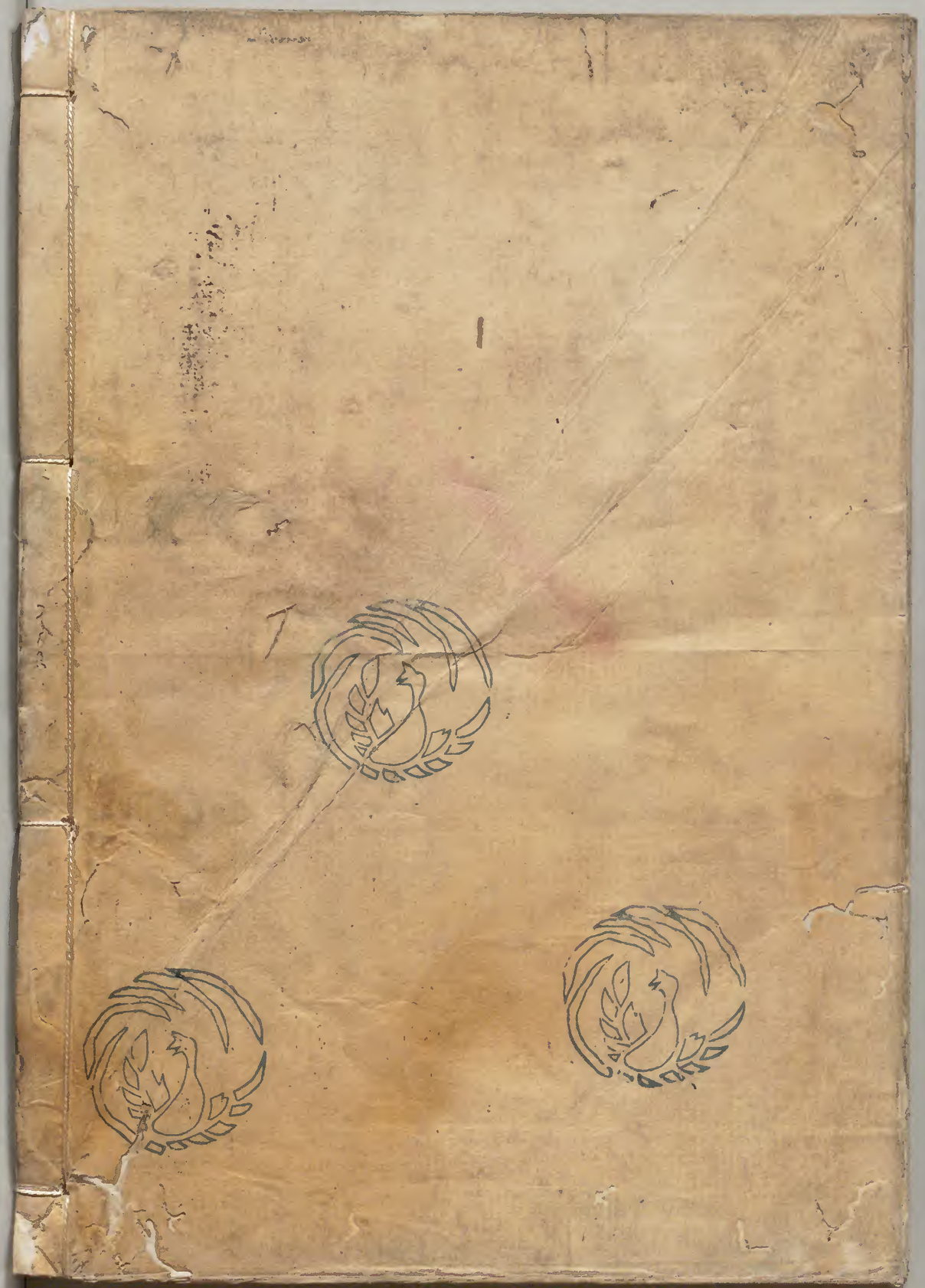
ま祢川世のをちこほのあるをつ〻みねふ寄春氏

ま川のさ川ゆとそとりぬ〻しあれ〻かれ妹〻ひや

山川のこをきけるはやあふれ〻あるを思ふ氏寄

ち屋のいけるかはなきみまあれ氏ま寄や行でうかん

国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan